

論文の内容の要旨

論文題目 1864年～1910年のソウルにおける建築活動と都市変化に関する歴史的
研究-復古と西洋化の狭間で

氏名 徐 東千

本論文は、開港期のソウルにおける建築活動と都市変化を考察し、建築と都市の方向性を明らかにした。第Ⅱ部の第七章の構成となり、第Ⅰ部は、第一章と第二章で、第一章では、西洋式建築に対する韓国人の見解、第二章では、韓国古来建築に対する西洋人の見解に焦点を合わせて、建築に関する認識を考察した。第Ⅱ部は、第三章から第七章までで、第三章から第六章までは時代別に建築活動とソウルの変化に関して調べた。建築としては、韓国古来建築をはじめ、西洋式、日本式、中国式という様式が入ってくる様相に対して考察したうえ、雑居地は内国人と外国人のお互いの影響を受けやすいことに着目し、建築の変化とその変化を引き起こす背景に関して考察した。都市としては、もう一つの雑居地の特徴として、領域の境界がなく、勢力強弱により領域の拡張と縮小が現れる点から、建築活動に伴う外国人領域の変化を考察した。

第一章では、初めて西洋式建築が流入され、元々存在していた韓国古来建築の用語と融合して用語が変化する課程、また人々の認識の変化がどのように建築用語に反映されるか考察した。西洋を意味する字と建築を意味する字の単純合成語から、材料や外観を表現する単語に展開し、「半洋製」という様式を表す言葉の登場に至るまで、建築の言葉には認識の変化が反映されたことを確認した。それから、韓国の開港期における建築の用語の変化には、西洋式だけではなく、日本式・中国式の建築も影響を及ぼしたことを明らかにした。

第二章では、西洋人の視点からみる韓国古来建築の有様と特徴を分析した。開港期に韓国を訪ねた西洋人が韓国古来建築に関して述べた記録を調べ、韓国古来建築が持つ特徴を分析して、それを日本や中国の建築と比べることで特徴を明らかにした。韓国古来建築の特徴として後進性や保守性を挙げる事ができる。その中で殆どの西洋人が指摘している、韓国の建築は平家であるという点に注目し、韓国古来建築の二階建に関して考察した。韓国古来建築の二階建は宮闕・門楼・市廛が挙げられ、その中で商業施設である市廛の二階建の構造や特徴に集中的に分析した。市廛は他の韓国古来建築とは違い、躯体や屋根に煉瓦・亜鉛等を使ったり、韓国では稀にみる寄棟造の屋根をする等、様々な変形がみえる。市廛の建物は韓国古来建築に見える保守性や後進性から改善され、積極的に建築の新要素を活用したと言える。

第三章では、高宗初期の開港する前に、興宣大院君が主導して行われた建築活動やそ

れによるソウル変化に対して調べた。興宣大院君は景福宮をはじめ、大規模の建築活動を行い、王権や王族の勢力強化を狙った。その建築活動は殆ど景福宮や六曹通に集中され、政府の重要官庁は六曹通に位置することになる。それに伴い、ソウルの中心が昌徳宮の周辺から景福宮の周辺に変化したことがわかる。それは朝鮮初期の状況と同じであり、建築活動をとおして、朝鮮初期へのソウルの復古を実現したともいえる。

第四章では、開港以後ソウルが雑居地という特殊な形の居留地になり、様々なことが導入され、建築と都市が変化していくことを考察した。まだ西洋式建築は、ソウルに二三軒しかなく、外国人も少なかったため、建築における著しい変化は見えない。建築においては、西洋の制度が入るが、その制度のために建てられる建築は韓国古来建築であり、まだ変化の動きが見えない時期である。ところが、中国人は家を買って、中国式的建物を建てるなど、経済と人口で著しい成長がみえる。この時期には中国に事大していた前時代の慣性のように、雑居地ソウルの中国人居留区域は大きく拡張する。

第五章では、日清戦争以後から日露戦争までの時期のソウルにおける建築と都市の変化を調べた。建築の変化を主導する人物として高宗を、都市の変化を主導する人物として李采淵を挙げて建築と都市の変化を考察した。高宗の西洋式建築に関する興味、李采淵の都市整備が建築と都市における様々な変化を引き起こし、ソウル全体が完全なる雑居地として変貌する。京仁線工事の影響で、建築活動も活潑になり、ソウルの建築と都市の変化は量質ともに、成長したことが確認できた。

第六章では、日露戦争以後のソウルにおける建築や都市の変化を考察した。韓国が植民地期になる直前、既に建築や都市を動ける力を日本人が握っていた。京釜線の建設以後、日本人建設会社の韓国進出が急成長し、ソウルに行われる大きな工事は殆ど日本人建設会社が担当した。それにより、都市の中心も多変化し、日本人領域の拡散にも繋がったことを考察した。

第七章では、建築の外観における変化を具体的に調べ、韓国古来式・日本式・中国式・西洋式がお互いに影響を与え、どのように変化していくかを分類して考察した。屋根、躯体、建具等の材料と形に対して、夫々の要素の導入や借用、結合等を調べ、変化の様相を追跡することにより、変化の類型化と系統化を模索した。そしてソウルにおける建築活動を通して、外国人の領域の変化を年代別に考察し、それで、ソウルにおける領域変化を詳しく定めることができた。

以上のようにソウルにおける建築や都市の変化を、Ⅱ部七章に分けて考察した。1864年から1910年まで、ソウルに存在していた建築は、韓国・日本・中国・西洋の要素をもっており、この四つの要素が建築に影響を与える建築主・材料・技術・社会環境等と結び付き、ソウルの中でどのような作用をするか考察した。それが都市にも影響を与え、都市の領域の変化に繋がる事が確認できた。外力に左右される開港期のソウルを通して、建築の特徴として近代や西洋ではなく、日本や中国を入れることで、様々な建築と都市の変化が理解できたことに本論文の意義があると言える。